

# 琉球大学学術リポジトリ

## ADHDの児童生徒を対象としたSST実践に関する国際動向 ―日本における活用可能性の検討―

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2022-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井口, 佳子, 照屋, 晴奈 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002019471">https://doi.org/10.24564/0002019471</a>

# ADHDの児童生徒を対象としたSST実践に関する国際動向

## —日本における活用可能性の検討—

井口 佳子\*<sup>1</sup>, 照屋 晴奈\*<sup>2</sup>

### International Trends in SST Practices for Children with ADHD —Feasibility and Challenges in Japan—

Kako IGUCHI\*<sup>1</sup>, Haruna TERUYA\*<sup>2</sup>

#### 要 約

本研究では、海外においてADHDの診断がある児童生徒に対するソーシャルスキル・トレーニング（以下、SST）の先行研究を収集し分析を行い、日本国内のADHD児童生徒に対するSSTの今後の応用と、実践課題を明らかにすることを目的とした。文献収集の結果、実践論文11件が抽出され、改善又は獲得しようとする行動・スキルに応じて「自己の抑制・防御型」7件、「対人・コミュニケーション型」1件、「複合型」3件に分類することができた。また「自己の抑制・防御型」、「対人・コミュニケーション型」、「複合型」に対し、文部科学省（2021）が示したADHDの児童に対する特別な指導内容の10項目に照らし合わせた結果、10項目すべての内容に当てはまることが分かった。今回の分析により、ADHDの特徴である多動性や衝動性、注意集中困難などの行動や情動の自己コントロールへの課題に、効果的であった支援・指導を明らかにしたことにより、日本においてもADHDの子どもへ効果的な指導法を検討していく一助として本研究で抽出された海外のSSTの実践を活用していけないのではないかと考える。

#### 1. 問題と目的

注意欠陥/多動性障害（以下、ADHD）は、年齢あるいは発達に不釣り合いな注意力、及び/又は衝動性、多動性を特徴とする行動の障害で、社会的な活動や学業の機能に支障をきたすものである（文部科学省、2008）。特に学齢期の子どもたちは、その行動特性のゆえに、友人とのコミュニケーションがうまくいかずに仲間外れにされたり、孤立したりすることが多くなってしまう。また、多動性や衝動的な言動は、教師や大人の目につくことが多く、学校でも家庭でも必然的に叱られる場面が多い。そのような失敗経験が積み重なり自己肯定感の低下が起こることも否めないのではない。岡田・後藤・上野（2005）は、「このような子どもには、スキルの知識的側面を教えるだけでは不十分である、（中略）ADHDがある子ども

への対応にはスキルの獲得だけでなく、セルフコントロールの改善や自尊心の育成も大切になってくる。」と述べている。

ADHDの治療として、米国児童青年精神医学会ガイドラインにおいて、6歳未満の子どもの最初の治療に行動療法を推奨しており、6歳以上の子どもに対して薬物療法と行動療法を両方行うことを推奨している。日本においても、ADHDを持つ子どもの治療は「1. 環境への介入」「2. 行動への介入」「3. 薬物療法」などを組み合わせて行うと効果が高いといわれている（稲垣・加賀、2021）。

また、薬物療法と並びソーシャルスキルトレーニング（以下、SST）はADHDの児童の治療に有効であるとも述べられている。現在アメリカではADHDの児童生徒・青年の3分の2が薬物療

\*<sup>1</sup> フリーランスカメラマン

\*<sup>2</sup> 琉球大学教育学部特別支援教育専修 講師

法と学校支援を受けており、それらと並行して最も一般的に行われている心理社会的治療がSSTである (Melissa L. Danielson et al., 2017)。SSTとは、認知行動療法と社会学習理論を基盤にした支援方法の1つであり、必要な知識(どのような言動が望ましいかなどの情報)を与え、練習(行動リハーサルやロールプレイなどを通して実際にやってみる体験)できるように支援の順序とコツを定め、構造化したものである(内閣府, 2010)。これらのことから、ADHDの特徴により社会的な活動に困難を抱える児童生徒にとって、SSTはスキルや知識を得るだけではなく、練習を行う場として目標設定や実行を繰り返し、実際の場面での成功体験に結び付けられるようにするための支援である。

文部科学省(2021)「障害のある子供の教育支援の手引～子供たち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて～」では、ADHDの児童に対する特別な指導内容について10項目の指導内容を示している。この10項目の中には、「ウ. 生活のリズムや生活習慣の形成に関すること」「カ. 集団への参加の基礎に関すること」など、ADHDの子どもに対する治療で挙げられた「環境への介入」と「行動への介入」に該当すると考えられる。現在、通級指導を受けているADHDの児童生徒はこの13年間で約15倍に増加しており、今後増加することが予想されるため教育現場で行うことのできる支援としてSSTの活用が期待できる。

そこで、本研究では、海外においてADHDの診断がある児童生徒に対するSSTの先行研究を収集し、分析を行う。次に分析結果を、文部科学省(2021)が示したADHDの児童に対する特別な指導内容の10項目に照らし合わせ、日本国内のADHD児童生徒に対するSSTの今後の応用と、実践課題を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

### 2-1. 資料抽出方法

#### 1) 文献抽出

文献の検索は、ADHDと診断された児童生徒を対象とした実践研究の国際動向を調べるためにGoogle Scholar, ERIC, J-STAGE, PubMedの4つの検索エンジンを使用して行った。検索式

はADHDとソーシャルスキルに関する用語を掛け合わせて行った。ADHDに関する用語は「ADHD」「Attention Deficit hyperactivity disorder」の2つとした。ソーシャルスキルに関する用語は「SST」「Social skills training」の2つとした。論文抽出中、SST Social skills trainingの同音異議としてSST Stop Signal Taskが検索に挙がったため除外した。このようにソーシャルスキルトレーニングと関係のない文献は除外した。

#### 2) 選定基準

抽出した文献は以下の選定基準を設定し、文献を精査した。

- ・最新研究の抽出のため、過去5年間(2017年～2021年)に発表された論文であること
- ・ADHDの診断がされている児童生徒が対象であること
- ・ADHDに対する実践プログラムを取り扱っていること
- ・オープンアクセス可能な論文であること

### 2-2. 分析方法

収集した文献を、著者、発行年、参加者数性別服薬の有無、年齢、内容、効果測定方法、測定者、実施期間の項目で整理した。その後、文部科学省(2021)「障害のある子供の教育支援の手引～子供たち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて～」第3編 障害の状態等に応じた対応、X. 注意欠陥多動性障害、1. 注意欠陥多動性障害のある子供の教育的ニーズにおいて、②ADHDの児童に対する特別な指導内容として挙げられている10項目と照らし合わせて分析を行った(表1)。

表1. ADHDの児童に対する特別な指導内容における10項目

ア. 注意集中の持続に関すること
イ. 行動の調整に関すること
ウ. 生活のリズムや生活習慣の形成に関すること
エ. 姿勢保持の基本的技能に関すること
オ. 作業に必要な動作と円滑な推敲に関すること
カ. 集団への参加の基礎に関すること
キ. 行動の手がかりとなる概念の形成に関すること
ク. 言語の需要と表出に関すること
ケ. 障害の特性の理解に関すること
コ. 情緒の安定に関すること

### 3. 結果

#### 3-1. 文献抽出結果

Google Scholar, ERIC, J-STAGE, PubMedで2017年以降に発行された論文のみを抽出するように条件を設定し、「ADHD and SST」「ADHD and Social skills training」「Attention Deficit hyperactivity disorder and SST」「Attention Deficit hyperactivity disorder and Social skills training」で検索した結果、以下ようになった。

表2. 文献抽出結果

	“ADHD” and “SST”	“ADHD” and “Social skills training”	“Attention-Deficit hyperactivity disorder” and “SST”	“Attention-Deficit hyperactivity disorder” and “Social skills training”
Google Scholar	2,000	4,360	1,640	3,830
ERIC	0	550	157	238
J-STAGE	69	79	32	5
PubMed	26	17	25	17
合計	2,095	5,006	1,854	4,140

#### 3-2. 抽出論文の分析結果

資料選定基準を満たした11件の資料に通し番号をつけ、治療・支援内容の分析を行なった。文献のプログラムの内容の分析を行った結果、目標習得スキル別に「抑制・自己制御型」「対人・コミュニケーション型」「複合型」の3つに分類することができた。

##### 1) 「自己の抑制・防御型」の事例

収集した文献のうち7件が抑制・自己制御スキルの習得を目標にしたプログラムとなっていた(表3-1)。プログラムの参加者の年齢は6～17歳になっており、参加人数は5人以下が4件(表3-1-資料番号2)～5)), 10人が1件(表3-1-資料番号1)), 20人が1件(表3-1-資料番号7)), 40人が1件(表3-1-資料番号6))となっていた。効果測定は4件が公的な評価尺度を用いて行われており、3件(表3-1-資料番号3)～4), 7))は観察シートや録画、ゲームのスコアなどの独自の

表3-1. 「自己の抑制・防御型」の支援・指導一覧

資料番号	著者名	対象者(性別)	年齢	内容	効果測定方法	測定者・実施期間
1)	Mourad Ali Eissa (2017)	10名	小学1年生	Cassady and Justin's Functional Model for Emotional Information Processing (感情情報処理のための機能モデル)を組み込んだプログラムで下記の5つのステップから構成される。 ①エンコーディング 個人が直面している感情的な出来事に関連する内部及び外部の手掛かりに注意を向けること。自分の感情と外部から得た他者の情報から相手の感情を推測し、分類分けをすることで、感情処理サイクルの適切な対処方法を習得する足掛かりとなるものになる。 ②台図の解釈と理解 感情の統合と理解に関わるステップ。①で受け取った手がかりの解釈と理解及び処理された感情の検討をする。 ③目標の明確化 手がかりの解釈の後に、結果を導くための目標の設定を行う。個人が過去の経験や知識を参照したり、社会的・文化的な受容性を調べたりする。 ④応答の選択と予測 ①～③のステップを踏まえ、状況に応じた実行可能な解決策を考える。 ⑤制定 ④で考えた対応や解決方法の実行。感情的になった児童をクールダウンする働きが期待される。	社会的な能力評価フォーム (Gottfredson et al, 2002)	指導者 10回のセッション (25～30分)
2)	Su-Je Cho, and Kwang-Sun Cho Blair (2017)	2名 男子1名・ 女子1名	13歳 12歳 (小学6年生)	問題行動に対応するリストを作成する。 ①スケジュールの柔軟性 タスク間に頻繁に休憩を入れる。児童はストレッチをしたり、歩き回ったりすることができる時間が確保できる。 ②問題への柔軟性 ステップを分割し、児童に合わせて段階的な課題への取組を可能にする。 ③座席配置の工夫 黒板周辺の整理 (視野の整理) ④視覚的な手がかり 課題やスケジュールを黒板に可視化した状態にする。	独自の観察記録	指導者2人・執筆者 約4週間

資料番号	著者名	対象者 (性別)	年 齢	内 容	効果測定方法	測定者・実施期間
				⑤信号 問題行動が見られると、5分間ライトが警告として点滅 ⑥クラス進行の手助け 教師と児童がクラスを円滑に進行できるようプログラム。 児童が黒板を消す、資料を配るなどサポートをする。 ⑦選択肢の提供 選択ボードを使用し、クラス内の活動を児童が選択できるようにする。 ⑧自己評価シート 自身のタスクを独立して行えるように、自身の設定された目標が達成できているかどうかを自己評価する。※のちの評価に使用する。 ⑨衝動性の調整 赤、黄色のカードを使用して、行動の衝動性を調節する。 黄色はスローダウン・一度考える、赤は停止を意味する。 ⑩コミュニケーション 助けを求める際は行動の除荷を要求する際に手をあげることを約束づける。 ⑪目標達成の動機付け 児童が目標を達せいできた際にできる特別な行動を設定する。 ⑫問題行動の無視 問題行動が発生することを前提として特別な支援は提供しない。		
3)	Ibrahim Said Ahmad ,Behrang Parhizkar,Selvaraj Oyyan Pillay (2017)	3名	12・13・17歳	・集中力向上を目的にした、数学的学習内容（簡単な四則演算）が組み込まれたモバイルゲームへの取組。	・独自の観察シート ・プログラム実施時の録画分析	執筆者 平均20分
4)	Jin-Kyung Kim (2018)	男子2名 保護者	7・9歳	在宅感覚運動プログラム ・参加者が関心のある以下の9つのタスクで構成。 ①床に寝転がる、②ロッキングチェアで揺れる、③緑石を歩く、④片足で立つ、⑤ベッドで跳ねる、⑥トランポリンなどで軽い運動をする。⑦自分の体をタオルやブランケットで包む、⑧鉄棒にぶら下がる、⑨手押し車 ・各参加者は上記の内容から5つを選択し、それぞれを8分間実行するように指示をする。	・CCTT-1及び2 ・BOT-2で参加者のプログラム介入前後を比較	保護者、執筆者 12週間（週4回、40分）
5)	Mi Ji Kim, Hae Yean Park, Eun-Young Yoo, Jung-Ran Kim (2020)	男子3名 服薬あり	9歳4ヶ月～10歳3ヶ月	Cog-Funプログラム：職業モデルに基づいて設計された実行機能と自己効力感を高めることを目的とした介入方法。 ・ステップA COSAを使用し、子どもの作業プロファイルを評価し、作業の達成目標の設定をする。次にADHDに関する映像を視聴し、子どものADHDに対する理解を深め、問題のある行動を映像で見せ、自分自身の課題を捉える。 ・ステップBとC ステップBは実行機能改善、ステップCは環境の変更と再構築をテーマにそれぞれ6セクションに渡って進行。各セッションのテーマとセラピストの提供するタスクに関連するゲームをプレイし、停止、計画、戦略を立てるトレーニングを受ける。各セッション後に保護者との面談が行われ、子どもたちが家庭でタスクを適切に実行するための環境づくりと子どもへの理解を深めるための保護者に対するフォローを行う。 ・ステップD ステップA～Cをまとめ、自身の達成目標と獲得した技能や戦略の概要を示す。	・BRIEF（実行機能の評価目録） ・CCTT（子どものカラートレイルテスト） ・HPC（宿題問題チェックリスト）	指導者、保護者 週2回 合計10回60分のセッション
6)	Kristin. Meyer et al. (2020)	40名 (男子28名、女子12名) 33人は服薬	8～11歳	ランダムに2つのグループに分け、集中力に特化したゲームを行う。治療群にはプレイヤーのスコアに合わせて難易度が上がる適応型、対象群にはあらかじめ設定された難易度の非適応型の3つのゲームを行うよう指示。 ①野球ゲーム 白色のボールが緑の枠内に入ったときにiPadをタッチする。稀に赤色のボールが投球されるが、その場合はタッチせずに見逃す。最大180回継続する。 ②魚ゲーム 動く魚のアバターを指でなぞりながら追い、餌を獲得して点数を得る。通常の色と異なる餌は回避するために魚から指を離す。異常な餌の回避に成功すると、魚が水面から飛び出し、コインをゲットするチャンスが与えられる。	・Swanson, Nolan, and Pelham-IV Questionnaire (SNAP-IV) ・Conner's Parent Rating Scale ・EGG(脳波測定)	執筆者 4週間 (20セッション)

資料番号	著者名	対象者 (性別)	年 齢	内 容	効果測定方法	測定者・実施期間
				③カタバルトゲーム カタバルトは飛行発射台という意味で、プレイヤーは画面を指に置き、発射ゲージをため、発射ゾーンまでたったら指を離しブロックを発射する。発射したブロックを積み上げていく。		
7)	Sofia Ahufinger, Pilar Herrero-Martín (2021)	20人 (10人がADHD)	6～13歳	ワーキングメモリと抑制制御に焦点を当てた6つのミニゲームを行う。 ・ミニゲーム① 画面上のドットが光ったか記憶し、それを再現する。成功したらドットの点滅が速くなり難易度が上がる。 ・ミニゲーム② 5つのロケットの列が表示され、中央にあるロケットの向き(左右)を回答するゲーム。ロケットは2秒表示され、プレイヤーが最初のセクションで75%以上正当した場合は、更に表示時間を短くしていき、2セッションが終了、もしくはプレイヤーが2回失敗したら終了。 ・ミニゲーム③ いくつかの宇宙船の画像を見た後にn回前の画像と同じ時のみに画面をタッチする。最初のレベルは前の画像と今の画像が同じであればタッチをする。正答率が75%以上になると、2つ前の画像と同じ画像をタッチする。表示時間は難易度によって変わる。2回連続失敗すると終了する。 ・ミニゲーム④ プレイヤーは見方の宇宙船を避けて、敵の宇宙人の宇宙船に撃って攻撃する。宇宙船は2秒間表示される。成功率が75%以上になると、何度が上がり、1.2秒の表示時間となる。2回続けて失敗すると終了する。 ・ミニゲーム⑤ 画面上に現れたエイリアンにできるだけ速く反応し、画面にタッチする。1～3秒のランダムの間隔でエイリアンが現れる。難易度が上がると、エイリアンが出現するウィンドウが増え、タップする画面も増える。 ・ミニゲーム⑥ 表示されている矢印の位置とは関係なく、矢印に示す方向と同じボタンをタップする。	ゲームスコア	執筆者 1回

評価方法をとっていた。

## 2) 「対人・コミュニケーション型」の事例

収集した文献(表3-2)のうち1件(表3-2-資料番号8))が対人・コミュニケーションスキルの習得を目標にしたプログラムとなっていた。運動療法にSSTを組み込んだトレーニングで、コーチや指導者のモデルとなる大人と、同年代のチームメイトとの対人関係に焦点を当てており、コスト面や場面の設定のしやすさの観点から再現性の高いプログラムと述べられている。

## 3) 複合型の事例

収集した文献のうち3件(表3-3-資料番号9)～11))が抑制・自己制御スキルと対人・コミュニケーションスキルの習得を目標にしたプログラムとなっていた。3件の文献では運動療法、AAI(動物の介入)、ロールプレイングが取り扱われており、いずれも公的な尺度を用いて効果検証が行われていた。運動療法で取り上げられているMultimodal HIITは負荷の高いトレーニングから粘り強さや集中力、28人の団体で行うことによってコミュニケーションや連帯感に対する関心を高める効果を期待された(Carolin Friederike

表3-2. 「対人・コミュニケーション型」の支援・指導一覧

資料番号	著者名	対象者 (性別)	年 齢	内 容	効果測定方法	測定者・実施期間
8)	Vallis, Raisa (2020)	12名	小学4年生	非競争的バスケットボールに社会的スキルトレーニングが組み込まれたプログラム。目標設定、問題解決、チームやルールの中での行動、成功と失敗の両方の処理、フィードバックの受入と修正、実行を行う。	児童への満足度アンケート	指導者(コーチ、インストラクター)5週間



Meßler, Hans-Christer Holmberg, et al., 2018)。また、児童生徒向けプログラムに保護者が同席したり(表3-3-資料番号11)), 同時刻にペアレントトレーニングを受けたり(表3-3-資料番号10))と保護者と一緒に参加する形式のプログラムも見られた。

3-3. ADHDの児童に対する特別な指導内容10項目との比較

1) 収集文献とADHDの児童に対する特別な指導の内容項目の対応分析

項目Aに関連するプログラムが6件(表3-4-資料番号2), 3), 6)~9)), 項目Iに関連するプログラムが9件(表3-4-資料番号2), 4)~11)),

表3-3. 「複合型」の支援・指導一覧

資料番号	著者名	対象者(性別)	年齢	内 容	効果測定方法	測定者・実施期間
9)	Carolin Friederike Meßler, Hans-Christer Holmberg, Billy Sperlich (2018)	28名(男子)	8~13歳	Multimodal HIIT (高強度インターバルトレーニング): 呼吸法や身体的負荷をかける時間を少しずつ長くしていくことで身体を強化するトレーニング。	・FBB-HKS ・SBB-HKS ・KINDL-R	指導者, 執筆者 週3回
10)	Sabrina E B Schuck et al, (2018)	80名(71%男子)	7~9歳	認知行動療法とAAI(動物セラピーを行う)グループと通常の認知行動療法を行うグループにランダムに振り分ける。AAIグループでは、介入の最初の9週間は認定セラピードッグ, 残りの3週間は子犬と共に、基本的な指示(来る, 座る, 伏せ)のトレーニングを行う。非AAIグループにも同様のSSTを行うが、セラピードッグの代わりにぬいぐるみを使用する。	・WAISI-II ・SPPC ・SSIS-P(保護者向け) ・ADHD-RS-IV ・PERM-P(数学のテスト)	指導者 12週間と6週間後の評価
11)	Kinkuri Sahib Kaur, Ranjit Pathak (2019)	3人(男子)	4歳5ヶ月~5歳6ヶ月	子ども1人に対して1人の親が同席する形で60分を4つのセクションに分けて行った。ごっこ遊び, ルールに則ったゲーム, ロールプレイングが主。挨拶, 会話, 絵やイラストの共有, 他人の手助けを行う, 行動の許可を求める, 他人を励ます, 助けを求める, 謝る, 辛抱強く待つ, 積極的に聞かせる, 規則に従うなどの社会スキルを盛り込んだゲームを行う。スターチャート, トークンエコノミー, パルンズなどを使用する。	Socialization domain of the Vineland adaptive behavior scales-second edition	指導者 全24週間(週2回, 60分)

表4. 抽出論文と10項目の比較分析対応表

資料番号	著 者	発行年	指導内容10項目との対応								参加者	
			A	I	U	E	O	K	K	C		
1)	Mourad Ali Eissa	2017						○	○	○	○	児童個人
2)	Su-Je Cho, and Kwang-Sun Cho Blair	2017	○	○				○			○	児童手段 指導者
3)	Ibrahim Said Ahmad, Behrang Parhizkar, Selvaraj Oyyan Pillay	2017	○									児童個人
4)	Jin-Kyung Kim	2018		○		○						児童 保護者
5)	Mi Ji Kim, Hae Yean Park, Eun-Young Yoo, Jung-Ran Kim	2020		○	○			○				児童個人
6)	Kristin. Meyer et al,	2020	○	○								児童個人
7)	Sofia Ahufinger, Pilar Herrero-Martín	2021	○	○								児童個人
8)	Vallis, Raisa	2020	○	○				○	○	○		児童集団
9)	Friederike Meßler, Hans-Christer Holmberg, Billy Sperlich	2018	○	○					○			児童集団
10)	Sabrina E B Schuck et al,	2018		○					○		○	児童集団 保護者
11)	Kinkuri Sahib Kaur, Ranjit Pathak (2019)	2019		○	○			○	○	○		児童個人

項目ウに関連するプログラムが1件(表3-4-資料番号5)), 項目エに関連するプログラムが1件(表3-4-資料番号4)), 項目オに関連するプログラムが3件(表3-4-資料番号2), 5), 8)), 項目カに関連するプログラムが5件(表3-4-資料番号1), 8)~11)), 項目キに関連するプログラムが5件(表3-4-資料番号1), 2), 5), 8), 11)), 項目クに関連するプログラムが3件(表3-4-資料番号1), 10), 11)), 項目ケに関連するプログラムが1件(表3-4-資料番号2)), 項目コに関連するプログラムが2件(表3-4-資料番号1), 10))であった。

#### 4. 考察

##### 4-1. ADHD児童生徒へのSST支援・指導について

今回分析した文献で最も多く見られた支援・指導が「自己の抑制・防御」に関する内容であった。自分や相手の感情を理解するための段階的なプログラムや自分の行動を振り返るためのリストを使った学級活動、また集中力の持続に焦点を当てたモバイルゲームなどが行われていた。「ADHDの児童に対する特別な指導内容」の10項目のうち、主に「ア. 注意集中の持続に関すること」「イ. 行動の調整に関すること」「キ. 行動の手がかりとなる概念の形成に関すること」の3項目に対応していることがわかった。ADHDは主に感情の制御や社会的なルールを守ることに加えて、瞬間的・衝動的な行動に困難があると言われている(Aduen, Day, Kofler, et al., 2018)。集中力の持続や抑制・自己制御、行動調整などのスキルを習得することはADHDの児童生徒にとって感情の制御や瞬間的・衝動的な行動への困難を段階的に解消する可能性がある。

「対人・コミュニケーションスキル」の習得に対する支援・指導として、今回分析した文献では運動療法と組み合わせたSSTが行われていた。チームメイトと協力する過程や、ミーティングでゲーム向上のための意見を述べたり相手の意見を受け入れたりすることを通して他者と関わる上でのコミュニケーション能力や受容性を高めることを目的に非競争性のバスケットボールを採用していた。今回分析した文献について「ADHDの児童に対する特別な指導内容」の10項目のうち、主に「イ. 行動の調整に関すること」「カ. 集団へ

の参加の基礎に関すること」「キ. 行動の手がかりとなる概念の形成に関すること」の3項目に対応していることがわかった。今回収集した文献の中で対人・コミュニケーションスキルに特化した支援・指導内容は1件のみで効果測定は参加児童に対するプログラムの満足度調査と指導者による評価によって行われていた。この理由として対人スキルやコミュニケーションスキルを数値化して測定し、評価を行うことが難しいことが考えられる。また、日常生活で行うコミュニケーションは、言語によるものだけでなく、非言語的な情報もある。非言語コミュニケーションとは言語的情報以外を使って行われるコミュニケーションのことであり、表情・視線・姿勢・しぐさなど様々な種類がある。Mehrabian (1968) は、メッセージ全体の印象を100%とした場合に言語内容の占める割合は7%、音声と音質の占める割合は38%、表情としぐさの占める割合は55%という法則を導き出した(高木, 2005)。そのため、対人・コミュニケーションスキルをより広義に捉え、今後の支援・指導内容を設定する必要があると考えられる。

前述した「自己抑制・制御型」、「対人・コミュニケーション型」の両方のスキルの習得を目標に行われた「複合型」の支援・指導には運動療法やAAI(動物の介入)、また保護者参加型のプログラムが含まれていた。「ADHDの児童に対する特別な指導内容」の10項目のうち、主に「イ. 行動の調整に関すること」「カ. 集団への参加の基礎に関すること」「ク. 言語の需要と表出に関すること」の3項目に対応していることがわかった。この結果は、今回分析した「自己抑制・制御型」の特徴と「対人・コミュニケーション型」の両方の特徴を包括しており、ADHDの課題とされる多動や衝動性、注意集中困難などの行動や情動の自己コントロールなどの困難へのアプローチとしてバランスの取れた内容になっている。また「複合型」に分類された3件の支援・指導は、児童の集団を対象にプログラムが行われたり、保護者や犬(動物セラピー)など児童と関わる相手が一緒にトレーニングを行ったりと本人と周囲の環境に介入する内容になっていた(Mikami, Smit, Khalis, 2017)は、親や教師、大人のメンターやクラスメイトの中での交流を行い、実際の社会環



境の中で行動トレーニングを行うことが役に立つ可能性を述べている。今回抽出した複合型の支援・指導の分析は、ADHDの児童生徒向けのプログラムに保護者やクラスメイトが参加する効果を示唆していると言える。

#### 4-2. 日本におけるADHD児童生徒へSST活用可能性

命婦・竹川（2018）によると、日本では1980年代から教育現場における児童・生徒へのSSTの実施と研究が行われるようになり、今日に至るまでADHDの児童生徒・青年を対象としたSSTに関連する様々な論文や実践報告は見受けられる。しかし支援・指導内容や方法、効果とその効果測定方法は各論文や実践報告によって異なる。また、SSTの効果については差があることも指摘されており、主治療としてのSSTと複合的な治療としてのSSTが区別されていないためSSTの効果は不明瞭である（Willis, Siceloff, Morse, et al., 2019）ことや、SSTの中心的課題として、教えたスキルが教室場面や日常場面で実際に活用され、維持されていくかという般化と維持に関する課題を挙げている（井上, 2012）。今回の分析からも対照群を設定せずに行った支援・指導の効果は、参加したADHD児童生徒個人の成熟度によって左右される可能性も考えられることから、SSTを取り入れた支援・指導の再現性に疑問が残る。

しかしながら、今回分析して得られたADHDの特徴である多動性や衝動性、注意集中困難などの行動や情動の自己コントロールへの課題が、SSTを取り入れた支援・指導で改善したという報告の存在も事実である。また、ADHDの児童に対する支援としていくつかの治療法や指導法を併用することが効果的であるとも述べられている（岡田・後藤・上野, 2005）。そのため、ADHDの特徴や児童生徒の実態をしっかり踏まえたより効果的な指導法を検討していく一助としてSSTを活用していけるのではないかと考えられる。

更に、今回分析対象とはならなかったが、文献収集の際にSSTの研究に関するレビュー論文が複数見られた。それらで述べられていたSSTの課題としては、再現性、対象児童生徒、または環境バイアスの問題（Storebø Andersen, Skoog, et al, 2019）、SST自体の有効性の不確かさ（Willis,

Siceloff, Morse, et al, 2019）などが挙げられていた。これらの課題は、これからADHDの児童生徒に対する支援・指導の実践を検討する上で重要な指標になり得るだろう。

#### 5. 研究の限界

本研究は、海外におけるADHD児童生徒に対するSSTの実践研究を収集・分析し、日本国内で行われている支援・指導と比較することを目的として行われた。しかし、選定条件に当てはまる論文数が少なく、満足な分析を行うには不十分であった。最新研究のレビューを目的としたため、抽出論文を過去5年間という比較的短い期間設定で行ったことに加え、オープンアクセスの実践論文数が少なかったこと、使用した4つの検索エンジン（Google Scholar, J-STAGE, ERIC, PubMed）では十分な数の文献検索が行えなかったことが考えられる。また、収集した文献を地域別に分析した際に、アメリカが4件、韓国が2件、カナダ、ドイツ、スペイン、インドが各1件と地域分布に偏りが見られ、ヨーロッパ諸国の文献はほとんど発見できなかった。今回使用した以外の検索エンジンを使用することで、他の地域の文献を収集することができる可能性がある。更に、今回はADHDと診断されている児童生徒に限定して文献を収集したが、診断はないがADHDの傾向がある児童生徒が対象の支援・指導を取り扱った実践も報告されていたため抽出文献が少なくなったと考えられる。今後は、検索エンジンの追加、地域別の支援・指導内容をその国の教育情勢や制度政策と合わせて考察を行う必要があると考えられる。

#### 付記

本論文は、第一著者が2021（令和3）年度1月に琉球大学教育学部に提出した卒業論文の一部を加筆、修正したものである。第二著者及び責任著者は琉球大学教育学部における第一著者の指導教員である。

#### 引用文献

- 1) 文部科学省（2021）障害のある子供の教育支援の手引～子供たち一人一人の教育的ニーズ

- を踏まえた学びの充実に向けて～、第3編、X 注意欠陥多動性障害。URL: [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/material/1340250\\_00001.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1340250_00001.htm) (最終閲覧 2021/12/24)
- 2) 文部科学省 (2008) 今後の特別支援教育の在り方について (最終報告) .
  - 3) 岡田智・後藤大士・上野一彦 (2005) ゲームを取り入れたソーシャルスキルの指導に関する事例—LD, ADHD, アスペルガー症候群の3事例の比較検討を通して—. 教育心理学研究, 53, 565-578.
  - 4) 稲垣真澄・加賀佳美 (2021) ADHD(注意欠如・多動症) の診断と治療。URL:<https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/heart/k-04-003.html>(最終閲覧 2022/1/20)
  - 5) Melissa L.Danielsogn, Susanna N.Visser, AndreaChronis-Tuscano, George J.DuPaul.(2017), A National Description of Treatment among United States Children and Adolescents with Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder. The Journal of Pediatrics, 192, 240-246.
  - 6) 内閣府 (2010) ユースアドバイザー養成プログラム (改訂版) 本編目次。URL: <https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu.htm>(最終閲覧 2022/1/20)
  - 7) 文部科学省 (2021) 障害のある子供の教育支援の手引～子供たち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて～第3編X 注意欠陥多動性障害。URL: [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/material/1340250\\_00001.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1340250_00001.htm) (最終閲覧 2021/12/24)
  - 8) Paula A Aduen, Taylor N Day, Michael J Kofler, Sherelle L Harmon, Erica L Wells, Dustin E Sarver(2018)Social Problems in ADHD: Is it a Skills Acquisition or Performance Problem. J Psychopathol Behav Assess, 40 (3), 440-451.
  - 9) 高木幸子 (2005) コミュニケーションにおける表情および身体動作の役割。早稲田大学大学院文学研究科紀要, 51, 25-36.
  - 10) Amori Yee Mikami, Sophie Smit, Adri Khalis (2017)Social Skills Training and ADHD—What Works?. Curr Psychiatry Rep, 19(12):93.
  - 11) Danielle Willis, E Rebekah Siceloff, Melanie Morse, Emily Neger, Kate Flory (2019)Convergence Study on the Effect of Music Mediation Program on Children with ADHD -Systematic Review and Meta-Analysis-. Journal of Digital Convergence, 17(10), 497-507
  - 12) 命婦恭子・竹川大介 (2018) ソーシャルスキル・トレーニングの新しいストラテジーの提案。西南女学院大学紀要, 22, 137-147.
  - 13) Danielle Willis, E Rebekah Siceloff, Melanie Morse, Emily Neger, Kate Flory (2019)Convergence Study on the Effect of Music Mediation Program on Children with ADHD -Systematic Review and Meta-Analysis-. Journal of Digital Convergence, 17(10), 497-507.
  - 14) 井上雅彦 (2012). 応用行動分析学をベースにした発達障害へのアプローチとその課題。教育と医学, 60(11), 986-992.
  - 15) Ole Jakob Storebø, Mette Elmose Andersen, Maria Skoog, Signe Joost Hansen, Erik Simonsen, Nadia Pedersen, Britta Tendal, Henriette E Callesen, Erlend Faltinsen, Christian Gluud (2019) Social skills training for attention deficit hyperactivity disorder (ADHD) in children aged 5 to 18 years. Cochrane Database Syst Rev, 21,6(6)

#### 分析対象論文

- 1) Mourad Ali Eissa (2017) The effects of Cassady and Justin’s Functional Model for Emotional Information Processing on improving social competence of first grade children with ADHD. International Journal of Psycho-Educational Sciences, 6 (1), 86-94.
- 2) Su-Je Cho, and Kwang-Sun Cho Blair

- (2017) Using a Multicomponent Function-Based Intervention to Support Students With Attention Deficit Hyperactivity Disorder. *The Journal of Special Education*, 50(4), 227-238.
- 3) Ibrahim Said Ahmad, Behrang Parhizkar, Selvaraj Oyyan Pillay (2017) Engaging Children with ADHD using Mobile Based Games. *International Journal of Communication and Networking System*, 6(1), 11-15.
- 4) Jin-Kyung Kim (2018) The effects of a home-based sensorimotor program on executive and motor functions in children with ADHD: a case series. *The Journal of Physical Therapy Science*, 30(8), 1138-1140
- 5) Mi Ji Kim, Hae Yean Park, Eun-Young Yoo, Jung-Ran Kim (2020) Effects of a Cognitive-Functional Intervention Method on Improving Executive Function and Self-Directed Learning in School-Aged Children with Attention Deficit Hyperactivity Disorder: A Single-Subject Design Study. *Outcome Measures and Assessment Tools in Occupational Therapy. Occup Ther Int*, 1250801.
- 6) Kristin. Meyer, Rosario Santillana, Brian Miller, Wes Clapp, Marcus Way, Katrina Bridgman-Goines, Margaret A. Sheridan (2020) Computer-based inhibitory control training in children with Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder (ADHD): Evidence for behavioral and neural impact. *Clinical Trial*, 30;15(11).
- 7) Sofia Ahufinger, Pilar Herrero-Martín (2021) Alien Attack: Non-Pharmaceutical Complement for ADHD Treatment. *PLOS ONE*, Inhibitory control training In youth with ADHD. *Entropy (Basel)*, 11;23(10).
- 8) Vallis, Raisa (2020) Building Social-Emotional Competence of Elementary Students through Noncompetitive Basketball Embedded with Social Skills Training. *BU Journal of Graduate Studies in Education*, 12(2), 4-7.
- 9) Carolin Friederike Meßler, Hans-Christer Holmberg, Billy Sperlich (2018) Multimodal Therapy Involving High-Intensity Interval Training Improves the Physical Fitness, Motor Skills, Social Behavior, and Quality of Life of Boys With ADHD: A Randomized Controlled Study.
- 10) Sabrina E B Schuck, Heather L Johnson, Maryam M Abdullah, Annamarie Stehli, Aubrey H Fine, Kimberley D Lakes (2018) The Role of Animal Assisted Intervention on Imp Front Pediatr. *roving Self-Esteem in Children With Attention Deficit/Hyperactivity Disorder*. 6, 300.
- 11) Kinkuri Sahib Kaur, Ranjit Pathak (2019) Play-based occupational therapy intervention on social skills in children with autism spectrum disorder and attention deficit hyperactivity disorder: A case series. *The Indian Journal of Occupational Therapy*, 51(1), 31-36.